

コルバンとスフラワルディー： イラン・イスラームと現代哲学との対話

ハサン・セイエド・アラブ

1. スフラワルディーとアンリ・コルバンの思想の簡単な紹介

1-1. シハーブ・アッディーン・スフラワルディーとは？

シハーブ・アッディーン・スフラワルディー、別称「照明学の師 Shaykh-i Ishrāq」は、1155年に現在のザンジャーン州郊外にあるスフラワルド市で生まれた。彼はマラーガとイスファハーンで学問を修めた。その当時、イスラーム神学者の一人イマーム・ファフル・ラーズイー Imām Fakhr Rāzī (1149-1209) とともに学んでいた。理由はよく分からないが、スフラワルディーは、マラーガとイスファハーンから、まずはアナトリアへ、続いてダマスカスとアレppoに向かった。彼はアレppoでアイユーブ朝のサラーフ・アッディーン Ṣalāh al-Dīn (対十字軍戦争を行った世に名高い司令官) の息子マリク・ザーヒル Malik Zāhir に謁見し、彼の宮廷に滞在した。ところが、スフラワルディーの学識のため、また、彼はイスラームのウラマーや法学者との論争に際して一切遠慮をしなかったため、彼は彼らの妬みを一身に買うこととなったのである。彼は異教徒 kāfir と呼ばれることすらあった。そして彼らは、マリク・ザーヒルに彼の処刑を求めたのである。しかし、マリク・ザーヒルはそれを思い留まったため、彼らはアイユーブ朝のサラーフ・アッディーンに直訴した。こうして、彼からスフラワルディー殺害の勅令が下された。父の命令により刑の執行せざるをえなくなったマリク・ザーヒルは、スフラワルディーの殺害を命じた。彼の死について多くは知られていないが、それにまつわる様々な伝承が残されている。スフラワルディーの死に方に因んで、イスラームの歴史家たちは、彼を「殺されたシャイフ Shaykh-i Maqtūr」

や「殉教せしシャイフ Shaykh-i Shahīd」といった称号で呼ぶ。コルバンもスフラワルディーの高い地位に敬意を払い、自著の中では常に彼を「殉教せしシャイフ」と呼んだ。

1-2. スフラワルディーの作品の簡単な紹介

スフラワルディーの作品は約 50 タイトルあるが、それらは五つに分類できる。

1. 大教育論文：『開示の書 *Talwīhāt*』『抵抗 *Muqāwimāt*』『道と場 *al-Mashāri‘ wa al-Mu‘ārihāt*』。そのほとんどは逍遙学派の手法で書かれている。スフラワルディーは、様々な箇所逍遙学派の哲学思想を引用しつつも、照明哲学の視点からそれを批判している。しかし彼の最大の著作は、照明哲学に関するスフラワルディー固有の思想を物語る、『照明哲学 *Hikmah al-Ishrāq*』である。

2. 小教育論文：『光の拝殿 *Hayākil al-Anwār*』『柱板 *al-Alwāh al-‘Imādīyah*』『タサウウフの言葉 *Kalamah al-Taṣawwuf*』『光の書 *Partaw-Nāma*』『哲学者の信念 *I‘tiqād al-Ḥukamā*』『心の果樹園 *Bustān al-Qulūb*』など。

3. 隠喩で書かれ、その多くがペルシア語である簡単な物語：『赤い理性 *‘Aql-i Surkh*』『ガブリエルの羽の音 *Āwāz-i Par-i Jabra‘īl*』『蟻の言葉 *Lughat-i Mūrān*』など。

4. 古典の註釈：クルアーンの章句やハディースの註釈、イブン・シーナーの『指示と勧告 *Ishārāt wa Tanbīhāt*』の註釈など。

5. シャフラズーリー *Shahrazūrī* (13 世紀の人物で照明哲学の最初の注釈者) が『心からの祈禱と嘆願 *al-Wāridāt wa al-Taqdīsāt al-Qalbīyah*』と命名した祈禱・嘆願・哀悼の文章。

1-3. 照明哲学の根源

大別してスフラワルディー哲学に影響を与えたのは四つの思想である。ここではそれらについて簡潔に紹介する。

1. 古代イラン思想。後述するように、スフラワルディー哲学は光に依拠する哲学である。イスラーム以前のイランにおいて、光はとても重要な意味と役割を持っていた。この光は（地上における神の代理としての）火と深い関係がある。この他にも、スフラワルディーは古代イラン哲学の宇宙論と天使論を頻繁に利用し、その役割をプラトンのアイデアと統合している。この点において、スフラワルディーは自らを、古代イランの哲学者たちの継承者と見

なしていた。彼は、これらの哲学者たちを「王の哲学者 *ḥukamā-yi khusrawānī*」と見なしていた。

2. ギリシア思想。逍遙学と呼ばれるスフラワルディー以前の哲学は、アリストテレス哲学の強い影響下にある。一方スフラワルディーはその哲学においては、アリストテレスではなく、プラトンや新プラトン主義の哲学者に傾倒している。つまりスフラワルディーは、このような見方によれば、イスラーム時代におけるプラトン主義の哲学者ということになる。

3. イスラーム思想。スフラワルディーはイスラーム文献の影響を受けている。彼は一方では、著書の中でクルアーンの章句やハディースといった宗教文献を幅広く利用した最初の哲学者でもあり、もう一方では（既に簡単に述べたが）逍遙学派の影響を受けている。

4. インド文化とヴェーダーンタ学派。ホセイン・ズィヤーイー *Husayn Diyā'ī* の研究によれば、スフラワルディーの哲学には、インドの諸学派、おそらくはヴェーダーンタ学派に関してもある程度の情報があり、その見解の一部も採用している。

この四つの思想に共通するのは、光 *nūr* と照明 *ishrāq* への関心である。光は火と深い関係を持つ。イスラームにおいても、神は、光のなかの光 *nūr al-anwār* である（スフラワルディー哲学において、光のなかの光は存在論の中の最も上位の階層とされる。それは純粋な光であり、この世界全ての真理である）。イブラーヒーム・ディーナーニー *Ibrāhīmī Dīnānī* によれば、スフラワルディーは光という言葉を選択した。彼はイラン人でありムスリムでもある。完全にそして一方向的に、その思想をギリシア思想に向けようとはしなかった。ギリシアで用いられていた存在の代りに、光を選択した。光はイラン的でもありイスラーム的でもあり、この光に関する証拠をプラトンの中に見出したのである。この問題は別の方法でも考察可能である。スフラワルディーが着目したゾロアスターとプラトンの共通点は光への関心であり、両者はスフラワルディーの光に関する哲学的構想を鼓舞した。また、クルアーンも光を強調する。スフラワルディーはこの点について、ある哲学的構想に依拠して『照明哲学』の中で言及している。よって、スフラワルディーはイスラーム世界で最初の文化哲学者と評価すべきだと私は考える。何故ならば、彼の哲学では、ゾロアスター教イラン、プラトン哲学、そしてイスラーム思想という三大世界がお互いに結びつき、共存しているからである。

1-4. スフラワルディーによる「シャルク」の理解

スフラワルディー哲学において、シャルク *sharq* (照明 *ishrāq* という言葉もまさにこの語から派生したものである)の理解は、幾つかの面を併せ持つ。一方でシャルクとは地理上の東、つまり、太陽と光の現出点を意味し、他方で東方の土地に住む人々の生き方を意味する。しかし、その哲学的意味においては、シャルクとは存在世界と人間の真理を意味する。人間は実際に東方の光に到達することで、精神的世界と天使の世界に至るのである。スフラワルディーの著作『西方への流刑 *Qiṣṣah Ghurbat Gharbīyah*』での解説によれば、人間は物質的世界に追放された存在である。人間はもともと住んでいた存在と光の世界から物質的世界にやって来ており、光の世界に帰るために努力する。この光の世界に帰ることが照明なのである。

スフラワルディーのシャルクについて一つ注意しておきたい点がある。このシャルクは地理学上の東方(つまり我々が地図上で確認する東)ではない。実はこのシャルクは存在の階層の連なりの北に位置する。コルバンによれば、このシャルクを理解するためには、一つの想像上の地理が必要となる。実際、人間の照明の太陽はこの想像上の地理上の北から昇る。この地理上の北は天使界であり、スフラワルディー哲学ではプラトンのイデア界に比せられるものである。

1.5 スフラワルディーと近代哲学

既に述べたように、20世紀初頭に至るまで、スフラワルディーは西欧世界では知られておらず、アンリ・コルバンとその同僚たちにより知られるようになった。ただし、ホセイン・ズィヤーイーによる研究、そして、入手した資料によれば、コルバン以前にも、マックス・ホルテン *Max Horten* (ドイツ人の有名なイラン研究者でホスラー *Höblier* とも友人関係にあった)とホスラーの間でスフラワルディーについての議論があったらしい。かなりの可能性で、ホスラーはホルテンを通じて、モッラー・サドラーやスフラワルディーに親しんでいたのである。この解釈と研究は事実上、近代のイスラーム哲学史の転換点と言えるが、ホルテンの思想の大枠は未だ明らかになっていない。

しかしこの事例を除けば、スフラワルディーが西欧世界に知られるようになったのには、間違いなくアンリ・コルバンの貢献が大きい。自ら述べているように、コルバンはハイデッガーの解釈学を鍵言葉として利用し、それを

イスラーム神秘主義哲学という独立の分野として普及させた。では、コルバンとは一体何者で、彼のスフラワルディー理解はどのようなものなのだろうか。

1-6. アンリ・コルバンとは？

アンリ・コルバン（1903-1979）はフランス人の有名な哲学者・イスラーム研究者で、比較哲学の創始者の一人としても知られている。彼は学生時代、エティエンヌ・ジルソン Étienne Gilson、エミール・ブレイエ Émile Bréhier、アレクサンドル・コジェーヴ Alexandre Kojève、ルイ・マシニョン Louis Massignon（フランス人の著名なイスラーム学者で、生前にコルバンを大学の後継者に選んでいた）といったヨーロッパの哲学の教授たちの下で学んだ。ある日、ルイ・マシニョンはスフラワルディーの著書『照明哲学』を当時弟子であったコルバンに渡し、それを読むように勧めた。コルバンは『照明哲学』を読んだことで、スフラワルディーの虜になったのである。そして死ぬ時まで、その思想に基づき、ヨーロッパ哲学を評論し続けた。

コルバンはその後トルコに渡り、イスタンブールの中央図書館でスフラワルディーの著作を調査した。イスタンブールからの帰国後、スフラワルディーに関する処女作を発表した。それからしばらく後、コルバンはドイツに渡り、ルドルフ・オットー Rudolf Otto、カール・バルト Karl Barth、ルドルフ・ブルトマン Rudolf Bultmann、マルティン・ハイデッガー Martin Heidegger などの人物のもとで勉強・研究に励んだ。コルバンは最初に、バルトの著作の一つをフランス語に翻訳した。しかし、彼の本質的な仕事はハイデッガーの哲学に関連するものだった。彼はフライブルク大学でハイデッガーの助手を務め、彼の依頼で、ハイデッガーの著作『形而上学とは何か』をフランス語に翻訳した。実際、コルバンはこの仕事により、ハイデッガーの著作の最初のフランス語への翻訳者として知られている。

これにもかかわらず、ハイデッガーの哲学も、彼のスフラワルディーとイスラーム哲学への愛着を減じさせることはなかった。その結果、彼はハイデッガーの哲学を捨て去り、スフラワルディーの故地であるイランに帰還したのである。以下、詳細にコルバンの哲学に対するスフラワルディーの影響について論じる。

2. コルバンとスフラワルディー

スフラワルディーに対するコルバンの見方は、彼がイランを重要視していることに着目するものであった。コルバンは、西洋におけるイラン研究の手法を用いて、スフラワルディー思想の重要性を探求した。スフラワルディーに向き合い、西洋の思想家と比較する中で、コルバンの研究手法は根本から覆った。彼はスフラワルディーを、イラン・イスラーム思想の代表者と考えるようになったのである。彼の考えでは、スフラワルディーは照明学に基づいた哲学的世界観を用いてイラン・イスラームを構想することに成功した人物なのである。

コルバンによれば、スフラワルディーは照明学派を構想する際に、ギリシア、イスラーム、イランの哲学を結び付けた。スフラワルディーは、イスラーム以前、そして以後のイランの精神的願望の保護者である、と彼は言う。コルバンは、照明を、知識の現出を示す言葉だと理解し、スフラワルディー思想では（既に述べたように）シャルクとは光と存在の源である、と言う。このようにして、スフラワルディーはイランの「過去」の荷を肩に背負い、それを「今」へと変換したのである。コルバンによれば、スフラワルディーは最も伝統的なムスリムの哲学者である。何故ならば、イランとイスラームとの照明の結合は彼の思想により得られ、それは哲学と禁欲主義との結合に留意するものだったからである。

コルバンによれば、イスラーム哲学とはイラン哲学そのもののことである。彼が言及する哲学者は、ファーラービー Fārābī (870-950)、イブン・シーナー Ibn Sīnā (980-1037) から、スフラワルディーを経て、モッラー・サドラ Mullā Ṣadrā の後まで続く。イブン・シーナーは王の哲学（古代イラン哲学）には通じていなかった。コルバンの著作では、スフラワルディーとイブン・シーナーの寓話の解釈が極めて重要な位置をしめる。スフラワルディーの寓話に関するコルバンの論文は、ペルシア語韻文の物語で終わる。『西方への流刑』は、イブン・シーナーの『ハイイ・ブン・ヤクザーン *Hayy b. Yaqzān*』が終わった時から始まる、と彼は言う。スフラワルディーの思想において、英雄叙事詩が神秘主義的叙事詩に変化したと考えているのである。

コルバンはイスラーム哲学を記述するのと同様に、その解釈の起源も追い求めた。このために、彼はそれを西洋の理論体系と比較するようになった。彼は比較した後、決まってその伝統から顔を背け、イスラームの神秘主義と哲学に顔を向けた。両者とも彼の著作の中ではお互いに優越がつけられてい

ないにもかかわらず、である。コルバンはイスラーム哲学におけるイランの本質と要素を、スンナ派ムスリム世界の同様の思想から完全に区別した。イラン人の文化的・精神的経験、特に、ゾロアスター教から得られた精神性と伝承された知識は、哲学的問題に関しては注目に値すべきものである。その結果、イラン人がシーア派イマームたち — 彼ラニ平安アレ — の言行を他のいかなるムスリムの諸民族よりも深く理解できるようになった。コルバンによれば、この現象はイスラーム哲学史に注目すべき影響を残し、特に、13世紀以降にそれは以前よりも明白なものとなったのである。

想像的世界 ‘ālam-i mithāl についてのコルバンの研究は、西洋の近現代哲学史における新しい考え方である。彼がスフラワルディーを選んだのは、想像的世界の発見者をスフラワルディーだと考えたからである。ムスリムの哲学者は、三つの世界、すなわち、1 想像、2 感覚 *ḥiss*、3 理性 ‘aql を想定する。知は理性により活発化し、その後、想像的世界から人間に対し照明される。スフラワルディー哲学では、理性と靈感が想像的世界に結合することで、真実を発見するのである。コルバンによれば、スフラワルディーの思想では、想像的世界は預言者と哲学者を区別するようなことはしない。スフラワルディーは、セム族の預言者の *nabawī* 伝統とイランにおける預言者の *payāambarī* 伝統を、そして、ゾロアスターをイスラームの宗教的伝統におけるムハンマドの光と同一視する。イスラームとゾロアスター教イランの古代哲学の間を取り持つ彼の役割は、イラン人と預言者のお家の人 — 神ヨ彼ト彼ノ一族ニ平安ト祝福ヲ与エタマエ — の間をとりもったサルマーン・ファーリスィー *Salmān Fārisī* (654 没) のそれによく似ている。また、古代イラン哲学をイスラーム哲学に結びつけたことにより、スフラワルディーは哲学と神秘主義を結合させたとも評価される。

想像的世界についてのコルバンの議論は、スフラワルディーの著作に関する彼の研究により明らかにできる。想像的世界は世界の精神的シャルクにおいて発見され、そこへの結び付きは極東、すなわち、中国と日本にまでにおいても明らかである。これゆえに、コルバンは東方の文化全般と同じ考えを持ち同じ言語で喋る。というのも、それらに共通するものの一つが、想像的世界への関心だからである。コルバンは明らかに、それをスフラワルディーに見出し、そのために、彼のスフラワルディーへの愛着は大きくなった。それは、彼をイラン思想の代表者と見なすほどであった。

コルバンによれば、イスラームとその精神的真理がイランを征服した。イスラームとは、イスラーム法、神秘主義、真理を束ねるものである。コルバ

ンはシーア派を特に好んだ。シーア派はイスラームの内面であると言うのだ。スフラワルディーの精神的系譜は、特にイランのシーア派哲学の伝統の中で生き続けた。ソシュヤーナートとゾロアスターの関係は、イマーム・マフディー — 神ノ祝福ト平安ガ彼ト清浄ナル彼ノ御先祖様ニアリマスヨウニ — とムハンマドの真理との関係まさにそのものである、というような形で。この点で、スフラワルディーの照明学の伝統とイマーム派の哲学は互いに結び付いたのである。コルバンによれば、イランにおけるスフラワルディー思想の普及には、モッラー・サドラーの思想が大きな役割を果たした。というのも、彼は解釈学的手法を用いてスフラワルディーを読んだからである。

コルバンによれば、照明哲学では知もある種の存在である。存在すなわち靈魂はその認識対象に現出すると通常は考えるであろうが、照明学派の理解では、存在の段階は靈魂の離在化に帰結するのである。彼がスフラワルディーの著作から得たこの存在理解により、ムスリムの領域の神秘主義の大部分を解釈できるようになったのである。というのもコルバンによれば、神秘主義とは存在知なくしてはありえないものだからである。彼は、このような知が東方世界全体に流布していると考え、極東の古い諸宗教でさえもこのような存在を大いに強調する、としている。コルバンは、モッラー・サドラーとスフラワルディーの哲学の共通点を存在知に対する強調だとする。哲学的基礎を存在知へおくことは、東方世界全体の中で、スフラワルディーとモッラー・サドラーの著作の中だけで確認できる。

もしも照明学から得られる知識が完全な状態に至らなければ、利己主義以外に何も得られないだろう。コルバンによれば、哲学者は精神的経験において高位の階梯に到達し、それは極 *qutb* と呼ばれる。これをシーア派の見解だとコルバンは言う。これゆえに、神的叡智とは哲学と精神的経験からなるのである。

コルバンの業績への評価は比較哲学の解説に拠ったものである。コルバンによる比較哲学の構造は、現象学的特徴を持つ。コルバンの比較哲学は、イスラーム哲学と存在哲学の言葉を同じにする。彼は、スフラワルディーをイスラーム以前、そして以後のイランの精神的傾倒に結び付き保持する者だと考えたため、スフラワルディーの成果を獲得したのである。

照明哲学についてのコルバンの説明には、哲学的性格が欠如している。コルバンはこの仕組みを紹介するに際して、その細部には注目しなかった。彼は照明哲学を神秘主義により矮小化したのである。コルバンにとって、王の哲学者たちの思考が哲学と精神的経験の集成であるのならば、このような関

心はイブン・スィナーの幾つかの著作でも確認できる。想像的世界についてのコルバンの研究は、西洋哲学の今日の歴史的必要性から生まれたものである。

コルバンはスフラワルディーだけを想像的世界の発見者と呼ぶ。想像的世界の位置の解釈についてのコルバンの文章は、歴史的含みを持つものではない。スフラワルディーの思想では、獲得と存在は特殊な位置をしめる。コルバンが照明哲学の中で存在について語る際、スフラワルディーの思想のこの特質に多くの関心を向ける。

スフラワルディーは哲学者の完全さを祈禱と議論の中に見出していたわけだが、しかし、コルバンはこの完全さに近づくために、祈禱を多く行った。コルバンは、彼の神秘主義的見解についての研究を行った。しかし、スフラワルディー研究においては、その論理学的作品への関心は比較的小さかった。論理学は、照明学派の存在知の中に居場所を持たないと考えたのである。コルバンはイスラーム哲学史の解釈者の一人であるが、その終焉をイブン・ルシュドだとは考えていない。コルバンは、イスラーム哲学の継続をシーア派思想の中に見出している。それは、ハージャ・ナスィール・アッディーン・トゥーサー *Khawājā Naṣīr al-Dīn Ṭūsī* (1201-74) に始まり、現在に至るまでもイランだけで続いている。

コルバンとセイエド・ホセイン・ナスルは、スフラワルディー神学の解釈も行った。当初はスフラワルディーについての彼らの見解には相違が見られたが、目指すところは同じであった。スフラワルディーの哲学を研究することで、彼の思想の結論を評価したのである。この手法はスフラワルディーによる現象学的手法と彼らにとっての神学的重要性に通じるものであった。コルバンは常にこのような手法を自身の研究に採用していた。コルバンとナスルはスフラワルディーの論理学には手をつけなかった。コルバンは、スフラワルディーの著作を校訂するにあたり、史料校訂の方法論上の困難に直面した。スフラワルディーの二つの重要な著作、すなわち『開示の書』と『道』の論理学の章を出版しなかった理由について彼は語っていない。この二つの著作の自然科学の章を出版していないことへの批判もまた可能である。コルバンは、照明哲学をスフラワルディーの神秘主義の現われだと考え、彼の論理的体系だとは考えなかった。コルバンの方法論の軽視もまた、そこに注目すべき影響を及ぼしているのである。

スフラワルディーの論理学はコルバンを、ムスリムの思想家の間に残っていたアリストテレス後のギリシア哲学の遺産へと引き渡すものである。彼は

スフラワルディーにおける論理学の真正を否定し強調した。スフラワルディーの手法はおのずから、哲学のための仲介者という領域以外は論理学には認めるべきではない、という考えを示している。もちろん、この議論を担保するものはスフラワルディーの考えの中にも見つかる。特に、論理学を哲学のための道具と考える時においては。同様にコルバンも、論理学は哲学のための手段である、という理解をこえることはなかった。しかし、このような見解が史料校訂という方法論の中に存在する危険に身を委ねることを許さなかったのである。

コルバンがスフラワルディーの著作の論理学と自然学の章を出版しなかったため、現代の人々は、スフラワルディーの神秘主義と照明学という側面を見出す。スフラワルディーが自著に用いた方法には気付かなかった。コルバンのこの過失により、スフラワルディーの著作の読者は、彼の照明哲学に到達するための論理的素養を理解できない。コルバンはスフラワルディー思想研究において、存在を獲得に優越するものと理解し、スフラワルディーの論理的・思考的方法の均衡を捨象する。スフラワルディーの神学がどのような論理的秩序から生じてきたのかを理解することなく、その読者がその著作の神学の章を彼の意見であると見なさざるをえないような形で。

実際に、コルバンがスフラワルディーの思想研究のために読者に紹介した出発点は、始点ではなく終点であった。というのも、スフラワルディー神学は、少なくとも方法論により彼の論理を獲得できるものなのだから。もちろん、これらの作品に関心を持ち、アリストテレス、ファーラービー、イブン・シーナーの著作と比較することは、スフラワルディーがイラン・イスラーム思想の代表者であるというコルバンの主張を確証するための大きな助けとなる。彼がスフラワルディーの著作における論理学とその位置付けについて更に注意していたならば、その著作における論理学のイラン的起源を説明することで、自らの主張をより容易く立証できていただろう。

コルバンは、スフラワルディーの著作における神的唯一性を示そうとした。スフラワルディーは躊躇しながらも、逍遙学以外の著作の中で、ギリシアの文化と哲学思想へのイランの影響の起源を示そうとした。スフラワルディーの論理学へのコルバンの無関心ゆえに、イラン文化のもつ普遍性を立証するという彼の仕事は不完全のまま残されたのである。スフラワルディーは論理学を、哲学研究のための道を開く手段と考えた。論理学に依拠する哲学は誤った考えに陥ることを防ぐ。コルバンはスフラワルディーの論理学の分析については無言を貫き、スフラワルディーの思想がいかに手段として論理学を

利用し得たのかについては、明らかにできなかった。その後、靈魂を光のなかの光の精神的照明の輝きにさらしたのである。